

松陵

能代高等学校同窓会
事務局
能代高等学校内
能代市高塚2-1
TEL 0185-54-2230
FAX 0185-54-2231
題字は神馬前会長

「同窓会会員の皆様へ」



同窓会会長
田中 仁 純
(第二十五期)

二十一世紀も目前に迫りました。アメリカ大統領選挙が渾沌としている様相をテレビで観ながら原稿を書いています。戦争の世紀にふさわしい二十世紀の終末の感であります。同窓生の皆様にはご健勝にてお過ごしのこと、お慶び申し上げます。十二年度はまず進学状況が好調であり母校にも勢いが感じられました。

また春の叙勲で佐々木満先生が勲一等瑞宝章を授章されました。二十二年間の国会議員としてのご活躍の功績です。また中村史朗先生が勲四等瑞宝章、体操能代の黄金期を築き、小野先輩はじめ多くの名選手を育成されました。同窓生としてはこの上

ない喜びであり、心よりお祝い申し上げます。前にも申しましたが今年には創立七十五周年であり記念事業として岩手県立大学長の西澤潤一先生をお迎えして「未見の我を発見せよ」の題でご講演をいただきました。世界的学者であり在校生はじめ同窓生の参加もあり、二十一世紀に向かう生徒諸君に「自分の潜在能力の開発」に努力し個性ある人生の歩みについての熱弁に生徒の心に灯をつけてくれたものと確信しています。同窓会からの支援により実現できたことを皆様に感謝申し上げます。いまIT情報化をめざし国をあげて取り組みつ、ありますが、学校も、そして同窓会においてもインターネットを開設、特に東京同窓会との連絡を密にしながら時代の波に遅れないよう体制を整えつ、あります。これ等も皆様からの毎年の寄付金によって成るわけですのでご理解賜りご協力をお願い致します。最後になりますが会員皆様の二十一世紀を迎えてのご活躍をご祈念申し上げます。

平成12年度能代高校同窓会

◆新年会のご案内◆

- ◆日時
平成13年1月26日(金)
受付 午後5時
- ◆講演会 午後5時30分～
・演題 「半世紀前の日本」
・講師 佐々木 満氏(第15期)
- ◆懇親会 午後6時40分～
- ◆会場
料亭 金 勇
電話 (0185)55-3355
- ◆会費
4,000円(当日持参)
- ◆当番幹事
30期(新制12期)
40期(新制22期)
- ◆参加申込
下記事務局へご連絡ください。

能代高校同窓会事務局
(能代高校内)
電話 (0185)54-2230
FAX (0185)54-2231

能代高校この一年

校長 清野 宏 隆 (第二十九期)



同窓会会員の皆様には、母校に対し物心両面にわたるご支援・ご協力をいただきました。ありがとうございます。本校は、校訓「至誠力行」をもとに「文武両道」の達成に取り組んでいるところです。

平成十二年三月の卒業生の進路は国公立大進学者が昨年と同じ百名で、私立大進学者の九十七名よりも多くなりました。また、大学・短大の進学率は七四・九%の高率を維持し、県内第三位(昨年二位)でした。学力向上対策としては、今年度から五十五分の六校時授業を導入し、生徒には「授業が大事」と授業重視を強調しております。

今年度の部活動では、体操部と陸上競技部が岐阜インターハイと富山国体に出場しました。野球は秋季全

県大会で軟式野球が優勝し、硬式野球は経法大付高、大曲農高を破りました。来年に期待したいと思っております。また、放送、新聞、無線、囲碁の文化部が全国大会へ出場しました。

九月には同窓会後援による創立七十五周年記念講演会が開かれ、西澤潤一先生の「未見の我を発見せよ」の講演は大きな感銘を与えました。十一月には全校生徒がテレビ会議システムを利用して、イギリスのグレスナム高校とスクリーン映像をとおして発信し、国際化・情報化時代を知る貴重な体験をしました。

今、学校の二千本の松は雨にも風にも負けずたくましく成長しています。生徒には、松に負けない生きる力を育てていきたいと考えております。

支部だより

北海道支部

「友有り、遠方より来る」

袴田清城（第五十一期）



平成十二年度北海道支部同窓会は、去る九月三十日札幌第一ホテルにおいて、母校より秋林先生をお迎えし、総勢九名と少数ながらも大変盛り上がった総会を行いました。

秋林先生より

後輩たちの文武両面での活躍が報告され、OBとして大変嬉しく思うとともに、我々も負けてはいられないとの感を強くしました。また当日は、遠路はるばる帯広から二名の参加を得、大歓迎を受けるとともに、母校の想い出話や近況報告に花が咲き、時間の経つのも忘れる程の盛り上がりを見

せました。最後に、母校の益々の発展を祈念して全員で校歌を斉唱し、来年の再会を誓い合いました。同窓会も会員の高齢化と若手の人気がなく、また、一口に北海道と言っても、広大な土地柄から会員が一同に会するのはなかなか難しいなど、課題は多々ありますが、会員同士の連絡を密にし、松陵健児の心意気を忘れることなく頑張っていきたいと思えます。

青森支部

柿本健次（第三十六期）



能代高等学校同窓会青森は、会も今年で第八回目を迎えてまして現在会員数三十六名です。今会は本部から同窓会副会長の続隆氏をお迎え致しまして二十二名の出席者で十一月二日ホテル青森で開かれました。

懇親会ではかなり盛り上がりまして二次会までも続きまして。会長の原田和夫

氏が今春みちのく銀行の頭取に就任なされ会長を筆頭にして松陵健児の意気込みを見せて皆さん青森県内で頑張っております。

青森県内在住の同窓生の情報をお知らせいただければ助かります。

母校の発展と同窓生のご健康を心より祈念致します。

県庁・能高会

「今年も盛会、県庁能高会」

佐藤徹（第五十一期）

六月九日(金)午後六時、県庁能高会総会は、佐々木満先生、田中仁純同窓会会長、清野宏隆校長先生をはじめとする多数の来賓、顧問の先生をお迎えして、秋田市彌高会館で開催されました。参加者は全部で六十名を超え、ここ数年では最高の出席者数となりました。行政改革により地方事務官制度が廃止され、職業安定関係、社会保険関係の職員が労働局、社会保険事務局に移管した関係で、県庁能高会の会員は若干減少しましたが、そのようなことを感じさせないほどの盛会でした。この総会で、役員が大幅に入れ替わり、宮腰一慶会長（第二十九期）の後を受け継いで、小野公生氏（第三十五期）が新会長に選出されました。新会長のもと、今後も会員相互の親睦と母校の発展のため会員全てが協力していきたいと思えます。

三たび

「わが校の応援歌のルーツ」について



昭和三十五年卒(三十期生)

工藤茂宣

筆者略歴

昭和三十五年能代高校卒
昭和四十一年弘前大学医学部卒
昭和四十六年弘前大学大学院医学研究科修了
昭和五十五年工藤泌尿器科医院開設
〔能代寮歌を愛する会〕幹事

松陵第十号と昨年の第十一号に、わが校の応援歌のルーツについて拙文を載せて戴いた。

これまでの要旨は①応援歌「戦わん哉」は旧制第四高等学校(金沢市)の寮歌「南下軍の歌」が元歌で、四高出身の故平川民治氏が能中の応援歌として採り入れた。二十九期生の平川長氏から「平川民治は私の父です。昔、父の古いレコードに能高の応援歌とよく似た曲がかなりあった」とお便りを頂いた。作詞は旧制能代中学十期生(昭和十四年卒)の久喜健男ら有志であった。「松陵健児」を造語されたのは久喜氏らである。②応援歌「北羽に吠ゆる」は旧制第六高等学校(岡山市)の寮歌「新潮走る」が元歌である。作詞者は不明。③凱歌「天馬空征く」の元歌は旧制第一高等学校(東京)の水泳部部歌である。作詞者不明。以上の三曲は「能代寮歌を愛する会」(会長 神馬恒成氏)で、毎回元歌とわが校応援歌を続けて歌っている。

④応援歌「日本海」の作曲者は音楽の先生。作詞者は、久喜氏によれば六期生の佐藤二郎氏。⑤「遠征歌」(潮騒さゆる北海の)の歌詞には、作詞者である当時の能中の二宮龍雄先生がご自分の母校で、しかもご自身が作詞した四高の寮歌「あ、幽冥の」と「滄溟千里」から二句を入れた。三期生(昭和七年卒)の小沼孫左工門氏によると、二宮先生は英語、

英作文の先生で、四高→京大出身の方。山上先生は博物学の先生で広島高等師範出身の方とのことだった。⑥わが校の「道遥歌」(洛陽寒く黄昏て)は大正八年(松陵第十号に十二年と記したのは誤りであった)の四高剣道部優勝歌を曲も歌詞もそっくり拝借したものである。わが校では一時、敗戦歌としても歌われた。

今年五月に、神馬恒成氏経由で三十五期生の横濱市在住の小野信継氏より、本校校歌の作曲者である岡野貞一氏についての資料が小生に届いた。岡野氏と校歌その他については、松陵第九号に当時の秋元正英校長がすでに書かれている。氏の資料は全て秋元先生に届けた。氏の資料で小生は、岡野氏は秋田県では、わが校のほか秋田鉱山専門学校、秋田北高校、鷹巣農林高校(その後のお手紙では金足農業高校も)の校歌を作曲していることを知った。本紙上を借りて氏に謝意を表す。

この稿では応援歌のルーツに絞りたい。昨年十二月に松陵第十一号が発行になって年が明けてから、久喜氏よりお手紙を戴いた。「故人となられた十期生有志も泉下で満足していることでしょう。送って戴いた現在の校歌・応援歌集では「戦わん哉」の歌詞は長年の口伝、口伝で、元句、元漢字が違ってしまっているが、ひどく相違しているわけ

ではなくむしろ良く口伝されている。いずれ作成当時の歌詞をお知らせする」と。

小生が催促して、作成当時の歌詞とお手紙が届いた。久喜氏が作詞の主体だったが、「南下軍」の歌があると教えてくれた野球部員の小山君(粕毛村)、歌唱指導の野球部員深井君(能代港町材木町)と共に歌詞を検討した。応援歌期成同盟グループの大原君(後に能高バレー部監督)、山内君(全県陸上短距離チャンピオン)、吉田君(就職希望組でトップの秀才。久喜氏と同町内の竹馬の友。戦死)らにも目を通してもらった。北嶋和信氏にも見てもらった。だから作詞は十期生有志でよい。原文も原曲も無いなかで採詞された先生方や採譜された中田先生のご努力には感銘しているという内容だった。以下、作成当時の歌詞と現在の歌詞を比較する。

〔作成当時の歌詞〕

一、戦わん哉時 到る 我に敵する何者ぞ 松陵健児
征く處 陣鼓山河に高鳴りて 制覇の希望(のぞみ) 今ぞ燃え 此處(ここ) 昂然の意気高し
二、春行き野辺の花霞 消えて松陵緑せば 血は湧き立ちて逆巻きて 燃ゆる意気の火に北の子は 利剣に光を仰ぎしが 遂に試練の時 到る
三、三年暫の夢追わぬ 益荒猛男(ますらたけお)の今日の栄え 時乾坤に移ろいて 聖者の鐘は今鳴りぬ 健児理想も華やかに 輝く制覇を成さん哉

〔現在の歌詞〕

一、戦わん哉時 至る 我に敵する何者ぞ 松陵健児
ゆくところ 陣鼓山河に高なりて 制覇の望み 今ぞ燃え 昂昂然の意気高し
二、春逝き野辺の花がすみ 消えて松陵緑せば 血は湧き立ちて逆巻きて 燃ゆる意気の北の子は 利剣に光を仰ぎしが 遂に試練の時 至る
三、三年暫の夢追わぬ ますらたけをの今日の日に 時乾坤に移ろいて 聖者の鐘は今鳴りぬ 健児理想も華やかに 輝く制覇をなさん哉

今ここで各字句の相違の解説をするには限りがある。久喜氏は字句、漢字の使い方についても大変気を遣われたようである。小生が調べた所では、「至」は真つ直ぐ行き届くさまを表わし、「到」は曲折をへて届くさまを意味する。周到、殺到、到底などのように意味が強いようである。試練の時なのだから「到」の方が合う感じがする。久喜氏の解説では、いよいよ時機到来の意で使ったという。以下、氏の説明では「春逝き」は詩的で美文調。応援歌にはふさわしくない。「行き」とした。「三年暫の夢追わぬ」は、作成当時は五年でゴトセと豪快に発音した。「ますらたけお」は漢字でない。現代では「丈夫武男」か。「聖者の鐘は今鳴りぬ」は、インターハイ(当時はインターミドル)の開会式および試合のプレイボールを表現したつもりである。「輝く制覇を成さん哉」は一番の五句「制覇の希望今ぞ燃え」に対応する「成就」の意味で「成」を使用した。

氏は「覇業」ではなく絶対に「制覇」だと以前からこだわっている。氏は「覇業」と言う語を良い意味には解しておられない。王道は正、覇道は邪という觀念である。氏は、例えば劉邦と戦った項羽が力の政治を行い、暴虐の限りを尽くして劉邦に敗れたのち、宗の曾鞏が項羽を漢詩「虞美人草」の中で「覇業已に煙燼に随ひて滅ぶ 剛強なるは必ず死し 仁義なるは王たり」と詩っているように、このような素養を身に付けられた方であろうと小生は拝察している。

つぎは、以前は敗戦歌とされ、現在は道通歌の「洛陽寒く黄昏て」である。

「寮歌祭もやま話」第七輯(平成十二年二月発行)で、名古屋大学医学部昭和三十一年卒の桑原益則氏の文によれば以下のごとくである。当時の四高の念願は毎年夏に行われる京都帝大主催の武道大会で優勝することだった。その頃の四高剣道部は六連敗後に大正八年と九年に連覇した。「洛陽寒く」は

大正八年初優勝の折り、市島成一氏(大正九年一部法。元東京、名古屋高検検事長)が京都の四高南下軍の宿で作詞したものである。以下の文割愛。四高歌詞もこの文から。

〔四高の歌詞〕

- 一、洛陽寒く黄昏て 雪や比叡にかかる時 紫金輝く旗蔭に 勝利(かち)を寿ぐ若武者よ
- 二、努力(ぬりき)の跡を見返れば 臥薪嘗胆こゝ六歳(むとせ) 落暉に立ちて薄命に 涙せし日ぞ幾度ぞ
- 三、凄風慘雨狂う夜は 疵に悩みて潜みしも 蛟竜遂に雲を得て 今昇天の時到来
- 四、涙と血とに勝ち得たる 光栄(はえ)の表徴(しるし)の尊さよ 希望(のぞみ)に明くる曙を 戦わん哉勝たん哉

〔わが校の歌詞〕

- 一、洛陽寒く黄昏て 雪や比叡にかかる時 紫紺輝く旗風に 勝利(かち)を寿ぐ若武者よ
- 二、努力(ぬりき)の跡を見返れば 臥薪嘗胆こゝ三年(みとせ) 落暉に立ちて薄命に 涙せし日ぞ幾度ぞ
- 三、凄風慘雨狂う夜は 傷に悩みて潜みしも 蛟竜遂に雲を得て 今昇天の時至る
- 四、涙と血とに勝ち得たる 光栄(はえ)の表徴(しるし)の尊さよ 希望(のぞみ)に明くる曙に 戦わん哉勝たん哉

以上、四高の歌詞と比較してかなり正確ではあるが、紫金輝く旗蔭に が 紫紺輝く旗風に 変わっているなど、耳で聞いてわが校の歌詞を書いたふしも同われる。

勝利と言えは 紫紺の旗 とばかり思っていた小生にとつて、紫金の旗 の紫金(しこん)を調べてみたら大変な奥深い意味があった。小生が知らなかっただけでもないが、以下のごとくともないスケールの大きな紫金であった。すなわち、紫金は紫磨金(しまごん)のことで、紫色を帯びた純粋

な黄金。紫磨金は閩浮檀金(えんぶだごん)のこと、閩浮提(えんぶだい)もとインドの称)の閩浮樹(えんぶじゅ)の大森林を流れる河の中に産する砂金。閩浮樹という樹は高さが百由旬(ゆじゅん)あり、由旬は古代インドの里程単位で六町を一里として一由旬は四十里・三十里或いは十六里という。一町は距離の単位では約百十メートル。まさに仏教と梵語の世界である。紫金輝く旗 とは仏教発祥の地インドの樹高十萬から二十六萬メートルの閩浮樹の大森林の中を流れる河に産する純金を散りばめた旗だったのである。並みの事をしてはとも手にするには出来ない旗である。松陵十号にも書いたが、どうりでこのメロディーは優勝したのに暗く重い。作曲者の平尾修一氏と作詞者の市島成一氏に敬服して脱帽。

紫紺なんぞは、残念ながら辞典には濃い紫色としか書いていない。過去のいずれかの時期に、耳で聞いて書き間違えられたのが日本中に広まってしまったのではないだろうか。

以上、「戦わん哉」も含めて歌詞が違っているのが悪いと言っているのではない。長い年月の間に、口伝、口伝、聞き書きなどが重なったり、また時代により、人により変化して行くものである。寮歌も然り。ある人が原楽譜を検討し「今我々が歌っているメロディーは何箇所原曲と違う」と言っても、みんな平気で今の歌い方で歌っている寮歌はかなりある。その歌い方が定着してしまつて、原曲通りに歌うとかえっておかしな歌になつてしまつてからである。特に応援歌などはそのようなのだろう。今回、わが校の応援歌のルーツを調べていて小生は楽しく、また大変有意義であった。関係の方々に厚く感謝申し上げる。

追記 たまたま「釈迦歎傷」を読む機会があった。その中に紫磨金色示群生(しまごんじきじゅんじやう)とあった。仏教に詳しい方なら意味がお解りと思う。